

# コクシジウム症を予防しましょう！

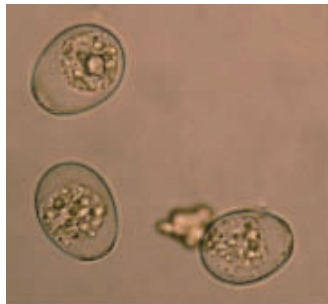
「子牛が血便している！」とか「水みtainな便が出るなあ」といったときにはコクシジウム症の可能性がります。コクシジウム症とは、コクシジウムという小さな寄生虫が体内に住みついて、下痢などの症状が出ることを言います。また、コクシジウムの生活環上、生後3週間から1才未満の子牛で被害が大きい病気です。

このコクシジウムは腸の細胞に寄生して何万倍にも増殖します。のんびり分裂増殖していると子牛の免疫にやられてしまうので、一気に増えます。ぎゅうぎゅうに溢れたコクシジウムで細胞が破裂するので、腸がダメージを受けます。寄生部位が深いと血管も巻き添えになり血便を起こします。しかし感染が少なければ血便はみられないので、コクシジウム⇒血便！という訳ではありません。重症な子牛が血便となるのです。

感染は糞便の経口感染でおこります。この糞便の中にはオーシストという卵のようなものがいっぱい入っているのです。この卵は、胃酸にも負けないくらい強い殻につつまれているので、寒い環境下や消毒薬にも抵抗性があります。

治療はサルファ剤で行います。抗生物質は効きませんが、傷害された腸粘膜から細菌が感染することもあるので抗生物質を使用する事があります。また、腸粘膜がぼろぼろになるため、栄養吸収ができない場合には、輸液も行います。これら是对症療法なので、いかに予防するかが重要になってきます。ただ、コクシジウムは多くの農場で常在化しているので、清浄化は困難です。しかし、コクシジウムが子牛に侵入したからと言って、必ず感染や発症が起こるわけではありません。侵入する量や子牛の抵抗力の強弱により変わってくるのです。

予防法として初乳摂取や感染牛の隔離、カーフハッチの消毒など環境的な面はもちろんとして、薬剤では「トルトラズリル製剤」があります。これは子牛の腸に潜んでいる全てのコクシジウムを削減する点で、従来使われているサルファ剤（一部のコクシジウムの増殖を抑制する薬）より有用です。トルトラズリル製剤は予防薬ですが、発症してから投与しても効果があります。ある時期にたった1回飲ませるだけなので簡単です。投与時期はその農場でのコクシジウム症の好発時期により異なりますが、1カ月齢以内に使用することで効果を得ている場合が多いようです。夏場は感染機会が増加します。コクシジウムに感染した子牛の発育は、感染してない子牛には追いつきません。コクシジウム症が予防できれば生産性があがると考えられます！！



コクシジウムのオーシスト



血便をする子牛

次は音別白糠診療所の鮎川さんにバトンタッチします。

(鶴居家畜診療所診療課 米澤 美沙)